



歌の歴史を旅することができた。安い買い物だったと言ったが良い。それにしても、さすがは世界に聞こえた戸山学校軍楽隊だ。小さな田舎町の中学校の校歌を、まるで進軍歌のように威風堂々と聞かせているではないか。華やかさには欠けていて、やや男っぽく、埃くさい演奏ではあるが、気のせいかな、ザックザックという足音や教官の号令も聞こえて来そうだ。それは時代背景の色でしかたがないとしても、当時の中学生が如何に雄々しく、凛々しく、しかも痛々しくオトナの世界に組み込まれていたか、戦争中だった私達の川中入学時代を思い起こして、感慨入りのものがあった。(高校二期)

# ある文明論

松本 博一



私たちの母校川越高校も西暦二〇〇一年で新しい世紀に入った。おめでたいことである。世に、世紀があらたまる前後には必ずといっていいくらい文明論議がさかんになる。人間存在の来し方、行く末を考えようということであろう。文豪漱石が明治日本の文明開化について「皮相上滑りの開化であつて、内発的でない」と警告したのはよく知られているが、漱石は小説の中でも、しばしば文明批評の鋭い言葉を投げかけている。

俳諧的小説「草枕」でも「汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によって此個性を踏み付け様とする」と書いている。日本がロシアとの戦争に勝つてにわかになら「一等国民」になつた喜びに浮かれていた明治三十九(一九〇六)年、二〇世紀初めのことだつた。上滑りであり、没個性的な明治の二〇世紀文明に漱石は嫌悪感

を感ずる。さへ懐いていたようだった。ドイツの数学者で哲学者のオスヴァルト・シュペンガーが「西洋の没落」を予言する本を書き、西洋以外の優れた文明の諸価値を認めなければならぬと説いたのも、第一次大戦の悲惨な結果に西欧の諸国民がおののいていた今世紀初めであつた。

日本でも多くの共鳴者をもつたアーノルド・トインビーの預言的な著書「試練に立つ文明」や「歴史の研究」は今世紀半ば、第二次大戦後に出された。世紀が変り、新しいミレニアムが始まったからといって歴史の展開がとくに変わっていくわけではない。しかし、世紀が移るとともに人類にとって新しい世紀が、よりよい、幸せな世紀であれかしと念願するのは自然である。

よくいわれるように二〇世紀は二度の世界大戦を経験した「戦争の世紀」であつた。東西の冷たい戦争はさいわい一九九〇年代初めに終わった。核戦争の脅威は遠のいた。だがイデオロギーの呪縛から解放された後には人種や民族間の対立抗争がむき出しになつた。人種や民族対立の背後にある宗教や文明の対立を重視する人たちの中には二十一世紀が「文明間の衝突」の時代になるだろうという予測をあえてするハーバード大学のハンチントン教授のような学者もいる。

このように二十一世紀がなお民族や国家間の戦争の危険性から解放されていない現状を考えると、この世紀にかける私たち人間の願望が何よりもまず「平和の維持」にあることは、いうまでもあるまい。それも十九世紀から二〇世紀にかけて支配的だった軍事的に「武装平和」であつてはならない。各地域の民族がその存在を認め、文化を尊重し合い、経済的にも協力し合つていく「共生の平和」でなくてはなるまい。

こういふと、国際政治の現実には「共生の平和」どころではない。戦後半世紀にも及んでなお深刻な対立が続いているアラブ・イスラエルの紛争をみよ、という反論が出よう。だが不毛のようにみえる国際社会にも一方では、二度の大戦を戦つた西欧諸国が戦後、平和的なヨーロッパをめざしてジグザグしながらも統合への歩みを進めている現実がある。欧州連合の始まりは過去一世紀半の間に二度も戦つたフランスとドイツ両国が永久平和の誓いを込めて欧州石炭鉄鋼共同体を創設したことにある。

それから半世紀、ヨーロッパ連合は東ヨーロッパをも包含した平和と共生の体制に移行しつつある。イギリスの政治学者ハロルド・ラスキがその著「政治学大綱」で述べているように、「ある世紀にはユートピアであつたものも、次の世紀には現実となる」のである。

もう一つ、二十一世紀の文明をめぐって深まる不安は美しい緑の地球を私たちの子孫にそのまま継承させることができるかどうかである。二〇世紀における科学技術の急速な進歩は私たちの生活を豊かにさせてきたが、同時に大量生産、大量消費、そして大量廃棄の

経済システムが資源を浪費させ、エコロジカルな循環を崩し、地球環境をひどく破壊し初めていることは周知の事実である。

この結果として起つている広範囲な砂漠化や地球温暖化の現象などについて効果的な対策が国際的に十分行われないうまま時間のみが経過している点に不安の源がある。以上、二十一世紀が抱えている文明の危機について、平和維持の保障が確かでないことと、生態学的な危機とを挙げたが、日本の場合、双方に大きな責任を負っている。ところが、一個の国民経済としてはアメリカに次ぐ世界第二位の巨大な力を持ちながら、九〇年代以来の不況の長期化によって国民の不安はつり、加えて機能不全に陥つている政治がいっそう国民の自信を失わせている。

私は今日の日本人が味わっている苦悶や閉塞感といわれるものはIT革命などによって救われるものではないと思う。文明史的にみれば、その苦悶は日本人が二十一世紀にあさわしい文明モデルを自ら創造していかなければならないことに根ざしている、内発的な苦悶だろふと思う。

明治時代の「お雇い」外国人教授バジル・チェンバレンが日本事情を紹介した「日本事物誌」の中で「日本の歴史の夜明けから今日に至るまで、中国文明に対しては西歐文明に対しても外国思想に対しては日本人のとつた態度は常に素直な学生の態度であつた」と評したように日本人の外来文化摂取の熱心さは広く世界の識者に知られている。戦後の経済的達成もその成果であることはいうまでもない。しかし今日はこれまで日本がモデ